

目的 近年、制服に関する是非の論議は多々なされているが、多くは制服のもつ強制力や画一性など社会的な面で論ぜられているように思う。制服は多くの人々が成長期において、殆ど毎日着用する重要な衣服であるが、身体の健康にどのような影響を与えているか否かは、未だ十分解明されていない。そこで約10年前に実施された調査研究をふまえ、今回、同様の調査を実施し、両者の比較検討を行い着衣実態の推移を考察した。青少年期の健康増進に役立つ資料を得ることは非常に重要であると考えた。

方法 阪神間に居住する健康な中学生を対象に、質問紙法による着衣実態調査を年間四季に亘り実施した。前回(1979~1980年、男子137名、女子149名)、今回(1988~1989年、男子131名、女子143名)共に調査内容の概要は、1)性、年齢、場所、体格、天候、寒暑・湿潤感覚、快適度、冷暖房、衣服の種類などの一般的事項、2)上半身および下半身衣服の被服構成、衿の開閉度、袖丈、衣服丈、材質、衣服重量、3)くつ下、ベルトなどの類被服類、4)衣服総重量、とした。結果を集計整理し、推移を考察した。

結果 衣服重量は、今回は前回に比し、秋季において男子 287.0 g/m^2 、女子 305.4 g/m^2 の減少が特に顕著である。また、上半身衣重は下半身衣重に比し減少の傾向が大である。温熱環境の変化に伴う衣服気候の調節は、主として上半身衣服の着脱によるが、今回は前回に比し改善の傾向が認められる。寒暑感覚は、夏季は他の季節に比し「不快」と訴える生徒が多く、今後の課題として検討したい。等身大銅製模型人体による着用実験結果もあわせ、更に検討し報告する。